

『海道記』の紀行文

千葉 覚
内藤愛子
小室啓子

平成十四年度文教女子短期大学の共同研究の助成を受け、私達（千葉・内藤・小室）は、『海道記』を取り上げた。

『海道記』が三部構成になっていることは、大方の一致した見方である。第一部は序文、第二部が紀行文、そして第三部は仏道理念の吐露となる。

心船いつはりの為に漕ぐ、いまだ海道万里の波に棹差さず。意馬あらましにはす、開山千程の雲に鞭打たず。今、すなはち、芳縁に乗じて、俄に、独身の遠行を企つととか

三十一字を綴りて、千思万億、旅の志を演べつ。此はこれ、文を以てさきとせず、歌を以て本とせず、只、境に牽れて物の哀れを記するのみなり。

と、序文に見えるように、「旅の記」である

ことは間違いない。第二部はまさにそれを示している。量的にもその中心を成すように評述され、我々読者に「紀行文」としての存在価値を示している。

ところが、第三部が問題となる。この仏道への思い入れの部分が何を意味するのか、紀行文としての価値とどう関連するのか、

そもそも、此は鞆中の景趣にあらず、存外の浅き狂言なり

という作者の跋の言葉と相俟つて謎を深くしている。全体の構成を考えるなら、諸書が述べるように、旅によつて仏教への信仰心を深めていった胸中の吐露、と捉えるのが妥当かもしれない。ただし、その深まりが、紀行文の表現から具体的に指摘でき、第三部に述べられている仏道理念が、旅においてどう展開されているのか仏教的見地から指摘される

ば、唐突な感も薄まるであらう。三木紀人^注氏が鳴海の浦での「蟹」などをあげ、「人間と人間以外の生物・無生物の相似・類縁に思いをいたして」き、「非情のものも仏性を持つ」という湛然以来の天台の教えによるもの」と指摘している方面、いわゆる「天台本覚思想」もそのさい大切な要素となるだろうと考えている。

それにしても、どうしても唐突な感が拭えない。出家遁世の身が「東国はこれ、仏法の初道なれば、発心沙弥のことさらに修行すべき方なり」と、東国をめざし修行の旅に立出しても「日数ふるままに故郷も恋しく」（鈴鹿山一市が腋）と、前途の不安からか、都を思う切ない心情が吐露される。

影を双べて行く道づれは、多くあれども、志は必ずしも同じからねば、心に違する気色は、友を背くに似たれども、境にふるる物の哀れは、心なき身にもさすがに覚えて、屈原が沢に吟びて、漁夫が嘲に恥ぢ、楊朱が路に泣きて、騷人の恨をいだきけんも、身の譬にはあらねども、逆旅にして友なき哀れには、なにとなく心細きそらに思ひしられて（鳴海）

と、旅の感慨とともに語る友を望んでいると

ころなどは、俗人としての旅愁を述べるのに
変わりはない。景観を述べるにも、

行々として重ねて行々たり、山水野塘の興、
壯観をまし、歴々として更に歴々たり、海
村林邑の感、長命なり。(序文・旅の概
況)

のように、決して深山幽谷にだけ興味を抱く
わけではない。

山の中半ば過ぎて漸く下れば、巖扉削りなせ
り。仁者の棲しづかにして楽しみ、潤水ほ
りながす、智者の砌うごけども豊かなり
と世俗を離れ、他に汚されることなく、修行
者の心を澄ます環境にひきつけられるが、す
ぐ続いて、

かくて、邑里に出でて田中の畦を通れば、
左に見、右に見る、立田眇々たり。或は耕
し、或は耕さず、水苗処々。而のみならず、
地溝かたがたに決くりて、水をおのがひき
ひきに論じ畦畝あぜを並べて、苗を我がと
りどりに植ゑたり

とあり、俗世のいとなみそのものを示す景観
にも目がゆくのである。つまり「紀行文」の
所では、世捨て人の閑寂で無心な境地よりも、
世俗的で現世的な感慨が随分と示され、現実
の景観の描写には旺盛な好奇心まで感じとれ

るのである。第三部の仏道理念との隔たりが
強く感じられる。

このような中世人をみてゆくのには、鳥崎敏
樹^{注3}氏の言葉が示唆に富んでいる。氏は芭蕉・
宗祇・西行をあげ、「真の漂泊者」を論じて
いるが、西行を「熱心な求道者としての精神
と感情移入的な歌人の心情とは、彼の中で一
つの座敷を占めた二つの魂だったらしくみえ
る。もし無色の寂境へ転脱しきつてしまえば、
美への未練はもうないから、さばさばと自在
にいられたはずと思えるが、『ねがはくは花
の下にて春死なんそのきさらぎの望月の頃』
とあこがれているように、現世で美的観照に
生きる心の根が断たれていない」とみている。

芭蕉も宗祇も含めて「芸術と信仰、美と聖と
の肉的分裂」を自覚し「たがいに矛盾する
二つの生活原理のどちらにも安住できない内
面的緊張」から漂泊への思いが生じていると
述べる。「熱心な求道者としての精神」と

「現世で美的観照に生きる心」が共存する西
行の延長上に『海道記』の作者がいると考え
てよいのではないかと思っている。

また、中世の遁世者という視点から言うな
らば、目崎徳衛^{注4}氏の言う「数寄の遁世者」も
関連するであろう。「遁世を一応の生活基盤

としてそれぞれ独自の行動の自由をたのしむ
存在」の中に含めて、「(西行・鴨長明・兼好)
これら三者の背後にはさらに龐大な同類が控
えていた」その一人に『海道記』の作者がい
るとみてよいと思われる。

これらの視点のもとに、『海道記』の「紀
行文」を読んでみようと思っている。

注1 『海道記・東関紀行・十六夜日記』

(日本古典全書・朝日新聞社) 所収
『海道記』解説。『古典の事典 精髓を
読む日本版4』(河出書房新社) 『海道
記』解説。『中世日記紀行集』海道
記・東関紀行・弁内侍日記ほか(新
編日本古典文学全集・小学館) 所収
『海道記』解説など。なお井手敦子氏
は第二部から第三部への転換を構造論
的に捉えて説明する。(『国文学研究』
第百十七集・早稲田大学国文学会)

注2 『紀行文』『海道記』の諸側面(『岩
波講座 日本文学と仏教』第九卷 古
典文学と仏教・岩波書店)

注3 「生きるとは何か」(岩波新書C78)

注4 「数寄と無常」(吉川弘文館)